

古都・奈良の新しい観光魅力 ～奈良町（奈良市）～

奈良観光の定番といえば「大仏」と「鹿」。その奈良で注目度が上がっているのが奈良市の旧市街地「奈良町」である。奈良公園からもほど近く、休日などにはまち歩きを楽しむ人たちがでにぎわう。

ユネスコ世界遺産にも登録されている元興寺の旧境内に広がる「奈良町」は、まちを分断する都市計画道路の事業決定をきっかけにまちづくりが始まった。奈良時代から連綿と続く古いまちの熱いまちづくりを紹介する。

1300年のまち・奈良町

奈良町は、奈良市の中心市街地にほど近く、興福寺や猿沢池あたりから南に広がる元興寺の旧境内を中心とした60haほどのエリアである。現在、奈良町という行政区画名は存在せず、奈良町の正式な範囲もあまり明確ではない。1898年の奈良市制施行とともに使われなくなった旧町名である。

奈良町の歴史は1300年前の奈良時代まで遡る。奈良町は平城京の東に張り出した外京げきやうにあたり、東大寺や興福寺等の寺院を中心に発展した。11～12世紀頃には社寺に関係する人たちの住居が増え、「郷」（今でいう「まち」）が形成された。鎌倉時代の中頃には郷内で市が開かれるようになり、商業活動や社寺と結びついた手工業の発展に伴って郷民の経済力・地位は向上した。室町時代の後期になると郷民たちは自治意識を高め、社寺の支配を離れて町民として自立するようになった。当

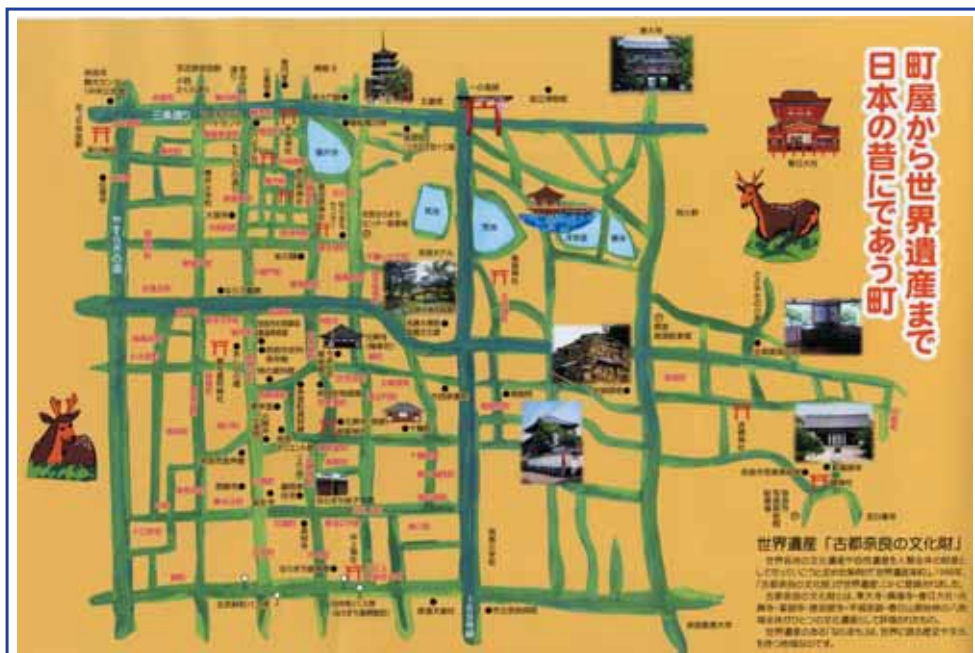
時の奈良町は、京都や堺と経済面だけでなく文化面でも深く結びついていたといわれる。

戦国時代には商業が規制され一時期さびれたが、江戸時代に入ると再びめざましい発展をとげるようになる。徳川幕府は奈良町奉行を置き、直轄地として町の発展を図った。晒や酒造などの奈良の伝統産業が活発化したのはこの頃である。しかし、産業の町として発展したのは江戸時代中期頃までで、それ以降は観光都市としての性格を強めて



元興寺極楽坊

奈良町は昔の元興寺境内にある



いった。

明治時代になると、元年に発令された神仏分離令により起こった廃仏毀釈運動で各寺院が大打撃を受け、この影響で奈良町も沈滞化した。1887年に奈良県設置が認められ、その2年後に町制が施行され奈良町が発足、その後鉄道の開通から商工業（蚊帳の生産等）が再び盛んになり、1898年には奈良市が誕生した。



今もまちに残る蚊帳工場



蚊帳地はのれんや
ふきんにもなる

大正期に入ると、折からの好景気とも相まって多くの観光客が訪れ、奈良町復興の原動力となった。戦後は昭和30年代に入ると、市の北西部で大規模開発が始まるとともに昭和40年頃から旧市街地である奈良町周辺でも都市化が進み、ミニ開発などによって街並みが変わっていった。昭和50年半ば頃からは人口流出や減少が顕著となり、

奈良町は衰退の一途をたどることとなった。

まちづくりは旧市街への危機感から

奈良町のまちづくりは、衰退する一方の旧市街への危機感から始まったといえる。直接のきっかけになったのは1975年の都市計画道路「杉ヶ町・高畑線」の事業決定と1977年の市役所の郊外移転だった。都市計画道路が通ればまちのコミュニティが2つに分断される。また、市役所の移転はまちのにぎわいの消失だけでなく商圈の喪失をも意味した。

都市道路計画に危機感を持った市民が1979年、「奈良地域社会研究会」を設立した。どうすれば地域の変容を食い止め、地域の特性を活かした歴史的環境豊かなまちづくりが可能なのかという観点から、質の高い道路づくりのあり方を研究した。ただ、同研究会のメンバーのほとんどが奈良町以外の人間だったことから、地元民には「よそ者」が勝手にやっていることとしか映らなかったという。

こうした状況を大きく変えたのは、同研究会が1981年から3回にわたって開催した「奈良町フェスティバル」だった。講演会やシンポジウム、奈

■奈良町のまちづくりの歩み

		主な活動内容		その他
			イベントの開催	
奈良町意識の芽生え	1978	「奈良を考える会」活動展開		都市計画道路「杉ヶ町・高畑線」事業決定（1975） 奈良市庁舎が大宮通へ移転（1977）
	1979	奈良地域社会研究会設立	第1回奈良町フェスティバル	
	1981	・「歴史的街区における都市計画道路のあり方と住民による町並協定推進に関する研究（トヨタ財団助成研究）」		
	1982	・「伝統的建造物群保存対策調査」（奈良市より受託）		
	1983		第2回奈良町フェスティバル	
1984	（社）奈良まちづくりセンター設立	第3回奈良町フェスティバル		
奈良町の活性化	1985	・「歴史と文化を生かした新商業地づくり調査」（奈良市より受託）	第1回まんだら市（台詞撃のため中止） 第2回まんだら市	「奈良・シルクロード博」開催 ならまちセンター開館 奈良市都市景観条例制定 「ならまち賑わい構想」発表（奈良市）
	1986	奈良町まんだら会発足		
	1987	（有）地域経営研究所設立		
	1988	・「地域住宅計画調査」（奈良市より受託）		
	1989	・「奈良町博物館都市構想調査・提案」（奈良市より受託）		
	1990	奈良町倶楽部発足（現：奈良町座）	第1回わらべうたフェスタ	
奈良町のまちづくりの模索	1995	伸座発足		「奈良町物語館」開館（1995） 都市景観形成地区指定（1996）
	1997	（有）伸座地域研究所設立		
	1998	・「奈良都市圏交通問題基礎調査」（建設省より受託）		
	1999	NPO法人さんが伸座設立		
	2000	・「サイクルネット」実験開始		
2004	（有）さんが奈良町設立	奈良町まちづくり25周年記念事業「賑・ならまち25」		

（資料：足立久美子「まちづくりにおける文化的イノベーションー奈良町と湯布院の事例研究を通じてー」（2005年）等をもとに当センター作成）

良町写真コンクールなど多彩な催しが行われた。奈良町全体を会場として展開したことから地元民の奈良町への関心が高まるきっかけとなった。

一方、同年にトヨタ財団の助成を受けて行った、都市計画道路のあり方や沿線の街並みのあり方に関する研究がマスコミに取り上げられ、奈良町への注目度が高まることにもつながった。

1984年には継続的なまちづくり活動の受け皿が必要ということで、同研究会が母体となって「社団法人奈良まちづくりセンター」が設立された。当時としては草の根の小さなまちづくり運動団体が法人格を取得するのは初めてであり、奈良町がまちづくりの先進地として全国に知れ渡るようになった。



町家の軒先には、代わりに災いを受けてくれるという「身代わり猿」が吊されている

このように地域内外から脚光を浴びるようになった奈良町だが、地元住民の意識は依然として傍観者のままだった。そうしたなか、1986年には地元の人たちが中心になってまちづくり組織「奈良町まんだら会」を発足させ、手作りフリーマーケット「まんだら市」を開催した。第2回「まんだら市」は来訪者が1万人を越す盛況となった。この来訪者の数の多さにいちばん驚いたのは地元住民たちで、以後の地元の積極的な動きに弾みがつくきっかけとなっている。

1990年には「奈良町倶楽部（現：奈良町座）」が結成され、それ以降「奈良町まんだら会」はこれに発展的に合流していった。同倶楽部は自主事業を行うのではなく落語会やアートイベントなど外からの企画に地元との調整を計りながらサポート

を行うことを活動の中心とした。今では奈良町の恒例行事となっている「わらべうたフェスタ」も1993年から同倶楽部が深くかかわっている。

旧市街地衰退に対する地元住民の危機意識から始まったまちづくりの動きであるが、これに行政の動きも加わった。1988年に奈良市制90周年記念事業として「奈良・シルクロード博」が開催され、奈良町を会場に連日イベントが繰り広げられた。

制度面でも1990年に「奈良市都市景観条例」が制定され、1996年に奈良町の48.1haが「奈良市都市景観形成地区」に指定されている。

奈良市の奈良町保全整備のバックボーンとなったのは1992年の「ならまち賑わい構想」である。奈良町まちづくりの理念と方向性が凝縮されたもので、これが行政と住民の共通認識ともなっている。また、同年には、奈良町活性化の拠点として「財団法人ならまち振興財団」が奈良市により設立され、以後施設面の整備も進められることとなった。

このように、順調に進んでいるかにみえた奈良町のまちづくりであったが、1995年頃から模索を始める。まちづくり活動の拠点を探していた「奈良まちづくりセンター」は1995年に奈良町の中の空き町家を改修して「奈良町物語館」を開館する。



奈良町物語館（正面）

同年には、ペナン・ヘリテージ・トラストやまちづくりセンターが参加する国際会議が奈良町で開催されている。奈良町の成果を国際的な視野で評価していこうという画期的な場であったが、地元住民には日常生活とかけ離れたことと映った。奈良町にこだわり続けるか、もっとまちづくりの

範囲を広くとらえ奈良全体を考えていくかで意見が分かれはじめていた。また、これまでのまちづくり活動はボランティア的な活動に頼っていたが、今後は経営感覚も必要ではないかという意見も出てきた。

地元・奈良町にこだわり経営感覚も導入した考えに基づいて動き出したのが、1995年に「奈良町倶楽部」のメンバー有志が結成した「^{くるまざ}俵座」(2000年「NPO法人さんが俵座」に改組)である。同年に国土交通省の社会実験で、有料レンタサイクルによる奈良の交通渋滞緩和に取り組んだり、2003年には歴史的景観と町衆文化の保存を図るため江戸時代の町家を改修し「奈良町家文化館くるま座」を開館するなど、より具体的に奈良町を活性化する取り組み活動を行っている。

奈良の新しい観光スポットに

1998年に「古都奈良の文化財」が世界遺産に登録されているが、元興寺とその保全地帯としての「奈良町都市景観形成地区」も含まれた。それ以降、奈良町への観光客の流れが定着するようになり、マスコミに取り上げられる機会も増えてきている。



まちなかに増えている雑貨店 コミュニティFMも開局

こうした奈良町への注目は、観光客だけでなく商業施設などの開業も促進している。最近では観光客向けにレストランや喫茶店、装飾品や雑貨を扱う店が奈良町のあちこちでできてきており、神社仏閣など歴史文化遺産を見て回るこれまでの奈良の観光スタイルとはひと味違う新しい観光ができるスポットとして定着しつつある。

町家の見学ができる「ならまち格子の家」へは、10年前の約2倍の8万人前後が訪れており、奈良町へはその5~10倍の来訪者があるともいわれる。



ならまち格子の家

おわりに

奈良町を歩くとわかることだが、観光地という風情はあまり感じられない。古い町家だけでなく、新旧の住宅や様々な店舗が混在し、雑然としている。金沢の東茶屋街や倉敷の美観地区などを思い浮かべて訪れた観光客はがっかりするかもしれない。

奈良町のまちづくりの中心的なリーダーである、奈良町工房 鶉屋倶楽部の六代目当主 田中宏一氏は言う。「『雑多』であることが奈良町の特徴。奈良町は幾多の盛衰のなかですべて古いものを切り捨てず、そのまま内包しながら方向転換を図ってきた」。

奈良町には今も多くの住民が生活しており、まちの「雑多」な雰囲気は住民の暮らしぶりから醸し出されるものでもある。



町の風情を醸し出す銭湯がまちなかにいくつもあ

まちづくりの先進事例として取り上げられることの多い奈良町のまちづくりは、これまでにみたようにまちの発展段階に応じていろいろと変遷を重ねてきた。

奈良町ではいくつかのまちづくりグループが同時進行している。これに奈良町の住民や商工業者らが重複して関わる。さらには、奈良町に関心を持つ奈良町以外の人たちや行政マンなども加わり、交流・学習・研究活動の輪を広げている。こうした「雑多」性こそが、奈良町のまちづくりの原動力となってきたといえよう。奈良町はこの「雑多」性をバネに今後も発展を続けていくに違いない。

(井阪、丸尾)